

「体験」ということ

樋口ミユ

自らの肉体から飛び出した言葉は強い。この肉体を使って、見て、触って、感じて、嫌というほど味わったこと、それを「体験」と呼ぶ。経験をしたことによって自分がなにを感じ、なにを考えたのかを言葉にして、いつしかそれが戯曲になることがある。それゆえ「体験」を持った作家の言葉は、震えている。では、「体験」がないことは書けないということかということ、決してそうではないだろう。経験がないのになぜこんなにもこの台詞は強いのか、震えているのか、突き刺さってくるのか、生き生きとしているのか。世界で起こっているすべてのことを、ありもしない世界を覗くことを、知らない時代を巡ることを、想像し思考し分析しシンクロして、未体験さえも経験に変えていく、そんな言葉を書くからこそ、作家は作家なのである。

ああ、血の色が見えると感じたのは山本彩さんの『花を摘む人』。台詞を読むと書かれている文字の向こう側に色彩鮮やかな風景が見える。ダムに沈んだ村という痛みのある現実を描くときに、奪う側と奪われる側に境界線を引かず、人間の未熟さと尊さの両極を見つめている。自然が見つめているのだ。それがこの作品をより広くて深いものにしている。優しさの言葉は実はとても残酷に辛辣に、人間の弱さを突きつけてくる。作家が人間というものを見つめた「経験」がそこに在った。

書かれたような「経験」はない、と受賞のスピーチで語った山村菜月さん。『その桃は血の味がする』ではこの言葉の鮮やかさはどこからやってくるのか。作家が見た世界から、作家が考えた思考から、作家が誰かから聞いた言葉から、やってくるのだと思う。この作家のフィルターを通して。では、5年後、10年後、どんな目で世界を見て、どんな言葉を紡ぐのか私はぜひ読みたいと思う。

「体験」といえば、初めての演劇体験ほど大事なものはない。田辺剛さんの『クローゼットQ』は、少年少女たちにとって忘れられない体験になったのだろうと想像する。なんとも掴みきれない印象、なんとも惜しいなという感想は、作家が客席の少年少女の感性を考慮しすぎたように私には思える。そっぽを向かせずに最後までお芝居に引っ張り込みたい丁寧さが、戯曲をブラックボックスに入れてしまったように感じた。

物語こそ本当に起こった現実ではなく、フィクションだ。演劇にしる映画にしる漫画にしる、そのフィクションに人は心を動かされる。それをホンモノ、ニセモノと言い換えれば、ニセモノにこそ心を動かされているということになる。では演劇はニセモノか、ホンモノか。その体験はニセモノか、ホンモノか。久野那美さんの『行き止まりの遁走曲（フーガ）』は、ホンモノとニセモノという人間の尺度で決められてしまうことから逃れてここにいる登場人物たちが饒舌に語る、まさに遁走曲（フーガ）である。であるならばモノ言わぬ灯台が船出をする方法は、人間たちのフィクションによってではなく、人間のルールや尺度を超えていって欲しかったと思う。ホンモノもニセモノも超えて。

高橋恵さん『ダライコ挽歌』はシンプルにダイレクトに、時代と人間を見つめ続ける「経験」を描いている。この物語の延長線上に、コロナの現在を想像した。時代を繋げて描いているから想像できたのだと思う。そして工場は劇場であり、会社は劇団のようだ。読んだ回数分だけ心に響いてくるのは作家の想いの積み重ねだろう。高橋さんという作家が丁寧に言葉と時間を紡いでいくことを知っている。だからこそ、新たな回路を見つけたいと思うのだ。上質と安心のうえに、さらに新たな発見をしたかったのだが見つけられなかった。それは私の我儘であるかもしれない。

上演は「体験」だ。イトウワカナさんの『砂利はポルカで踊る』は、戯曲以上の上演だったと想像する。サチコの人物造形は俳優の肉体を通すことによって成されたはずだが、戯曲からは読み取れなかった。ストーリーはある。出来事もある。登場人物たちも個性的。会話が軽快。しかし知りたいのはサチコという人間だった。だけど焦ってはいない。きっと彼女はいつしか大賞を担うだろう作家だと思うからだ。

置き換えるというのも「体験」のひとつだ。くるみざわしんさんの『白地に赤く、日の丸とカ

ッポウ着』。軍服を割烹着に置き換えて知らしめていく、国を動かす政治や経済のなんとずさんなことか。正しい、とても正しい。たくさんの資料や情報を読み込んだのだろうとも思う。あの戦争からなにも変わらない現在への批評も含まれているのだろう。もちろん、知るための演劇があって良いのだ。そして、ふと思う。作家の言葉はどこに。この膨大な資料の向こう側に、なにを見て、なにを体験し、なにを考えたのか、それを、作家の言葉として読みたいと思った。

大きな問題を見据える時、私たちはどこにいるのだろうか。道を踏み誤るその人こそ、自分かもしれない。私たちは今どこにいるのか。作家は自分の現在地をいつも確認し続けなければならない。人間は複雑で簡単だ。自分でも知らぬうちに、あっという間に、自分が最も嫌悪する向こう側に立って叫んでいることもあり得るのだから。

こんなにたくさんのことを書いたにもかかわらず最後に矛盾することを。

この場は戯曲賞であるので不似合いかもしれないが、他者の言うことなど正直どうでもいいのである。書きたいものを書くに尽きる。他者の目などを気にしていたら言葉がつんのめる。自分の目を閉じて、他者の目で自分の本を書いたら何も気づけない。自分の目で見るとしかないのだ。体験していないことさえも、見つめて考えて必ず自分の経験に変えて、自分の視界を広げるしかないのだ。そのために他者がいる。自分を誰にも明け渡すな。誰も彼も追いつかせるな。作家はただ走り抜け。